

## 「持続可能な社会」への構造改革

(琉球大学)

人類は産業革命以降、工業文明の恩恵を受けて快適な生活を続けてきました。しかし、それと同時に自然環境の破壊も続けてきました。今日の世界では「大量生産」「大量消費」「大量廃棄」が行われています。砂漠化、地球温暖化、これは今、まさに地球そのものにかかわる深刻な問題です。日本では、大量のエビを輸入しています。輸出をしているインドネシアはどうでしょうか。エビを輸出するために大量のマングローブの木を伐採してエビを養殖しています。日本が、環境保護のために伐採は良くないからエビはもう要らない、などと言えばインドネシアの人々は生活をしていけません。このように発展途上の国々では自然を破壊しなければ生きていけない国が多数あります。環境保護を叫んでも、今この世界の体制では大変難しいことのように思われます。このようなことが起こるのは、先進国や発展途上国があるからではないでしょうか。また、環境と共生を切り離して考えるからこのようなことが起こってしまうのではないのでしょうか。私達の考える循環・共生型社会は、全世界の連邦国家ではないのでしょうか。国境があるために輸入輸出をしなければなりません。そのために環境破壊が生まれるならば、国境をなくし、技術が足りないところがあれば技術を持っているところが派遣し、資源が足りないところには資源のあるところがあげたりすることができれば、まさに私達の理想とする循環・共生社会ではないのでしょうか。自然とだけでなく、人々とも共生することができ、自然の中でうまく循環するのではないのでしょうか。しかし現実では循環や共生面の問題は山ほどあります。自分たちの理想とする循環・共生型社会にはまだまだ遠い状況です。だから先進国も今の工業文明を脱却し、適性消費、省エネ、リサイクルを原則とした循環型の文明に転換していき、発展途上国の見本となっていかなければならないのではないのでしょうか。小さいものでも大きくなれば大きな力になると思います。そういうことでまず今、私達が必要ならなければならないことを考えていきたいと思えます。

次に、私達は「今何ができるか」ということについて考えました。まず、身近な例を挙げると沖縄県北中城村大城集落での地域住民による参加型環境改善活動（花咲じじい）の例があります。今日の環境問題が生活行為全般に関わる社会問題であって、市民一人一人が環境に配慮した生活様式を実践することが必要になってきたことを考えると、この参加型環境改善活動は大変重要な意味を持っていると考えます。海を渡った国、デンマークではビンやペットボトルを数十回使用することによって、循環型リサイクルを実践しています。またこの国では消費税を25%にすることで、消費を抑制する体制もとられています。また、デパートなどでの過剰包装は、ライフスタイルに起因する環境負荷として挙げられます。そこで、自ら袋を持っていく事などの努力は大切だと思います。今年、わが国では家電リサイクル法が施行されました。ごみの量を減らすために、廃棄後の処理が困難な製品に関しては、その製品の価格にごみ税を上乗せするといったことは今後もっと必要になってくるだろうと思えます。これまでに時代を先取った多くの企業が、ハイブリッドカーに代表されるエコロジカルな事業を行ってきましたが、地球環境に評価できるような目立った結果が得られていないことを考えると、国が介入して行われたソフト的な整備は効果があるのではないかと考えます。さらに、リサイクルがおこなわれている製品に対して、国がお金を援助し、再販売価格が下がればリサイクルが進展するのではないのでしょうか。私達は、一時的な考えでお金や時間を費やすより、長期的な計画を立て消費をすべきだと思います。循環と共生は地域活動から始めることが重要であると考えます。また私たちは、自分たちにできることを訴えていくことで循環・共生型社会を目指していくことを提案します。「持続可能な社会」への構造改革が早急に必要なら現在において、多くの人たちが環境問題を知り、意識改善をすることによって、ライフスタイルを変化させることが必要なのではないのでしょうか。